
癒えぬ傷跡。

ノル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

癒えぬ傷跡。

【Nコード】

N5043T

【作者名】

ノル

【あらすじ】

リトアニア帰りの魔法使い、砂流 落音。

彼女はある理由で日本に帰ってくる。

そこで出会うのは同じクラスとなり最初の晩に助けた翡翠 遥華であつた。

落音は彼女の名前が自分の実名、紅 刹那と名前と苗字ともに真逆なことに疑問を抱く。

遥華には両親がいなく、落音は自分の家に泊まらせる。

落音が、いや全ての魔法使い魂と実名と引き換えに集める七つの罪。
その名前は

『暴食』『怠惰』『傲慢』『嫉妬』『強欲』『色欲』そして『憤怒』
これらを集めれば世界の全てが手に入るといふ……。

六つ罪を集める間に

落音の過去が落音を苦しめる。

魔法使い

「んーっ！」

ビルの上で背伸びをする
久々の日本の天気だ

「・・・

でも、そうしてる暇は・・・
ないみたいね」

一人の少女

それを追いかける黒い何か。
一人と一つを目で追いながら
ビルから下りる

いや

正確には・・・

飛んだ。

「はあっ・・・はあ・・・っ！」

もう！何なのよあれ・・・！

はつきりは見えないけど、絶対人じゃない・・・！
私を追ってきてるはずなのに・・・

私の走りにペースを合わせてるみたい・・・。

「体力を・・・消耗させるつもり・・・？！」

・・・確かに少しスピード落ちて・・・

ガッ

「きゃ・・・っ！」

こける。

はっとして振り返る

黒い影は少しずつ

確実に近づいてくる・・・

「い・・・や・・・」

怖くて立てない

黒い影はすつと手のようなものを伸ばして

私の腕を引っ張った

その手はぬめり家があつて

・・・冷たかった

「——っ!？」

や・・・っ!

離してよぉーっ!!」

生きてるっていう冷たさじゃない。

確実に死んだモノのような冷たさだった

「はいはいそのままそのまま」

そんな声と共に

私と同じ年くらいの女の子が下りてくる

呆然としていると

手が解けて黒い影も消えていた

「大丈夫？」

月明かりに照らされた彼女の顔は

とても美しかった

「あ・・・

ありがとう・・・ごじます・・・」

とりあえずお礼は言っておこう

彼女は微笑んで

「大丈夫そうだよかったわ

・・・じゃあ」

「あ!

ま、まって!!」

帰ろうとする彼女を止める

「・・・何？」

「えと・・・」

何者・・・なんですか・・・？」

彼女は冷たい表情で答えた

「・・・ただの、魔法使いよ」

それだけを言つて、彼女は去った。

「魔法・・・使い・・・」

本当にいたんだ・・・」

次の日

私はボンヤリと考えていた

「よーしみんな座れー」

先生の呼びかけに一同が座る

ざわざわと皆が騒ぐ

今日は転校生が来るらしい

先生は皆を静かにさせた

そして――。

ガラッ

扉が開く

私は目を疑う

この子は昨日の・・・

魔法使い・・・さん

すなながれ
「砂流 らくの 落音です。」

よろしく願います」

「砂流は日本生まれだが

昨日までリトアニアにいたんだ。

仲良くするように」

リトアニア・・・。

私は考え込む

でも、机の文字で

考えるのを止めた。

そうだ・・・

この学校・・・転校生は・・・。

「砂流の席は・・・。

翡翠^{ひすい}の隣だな」

「え・・・」

先生の言葉に心臓が跳ねる

私の隣だ

彼女が歩き出す

それと同時に

クラス中からクスクスと

笑い声が出てくる

私も転校生だったから良くわかる

この学校は、この辺りでは名の知れた学校だ

転校生、つまりよそ者は

虐められる

一人の子が足を出す

転ばせる気だ。

あそこで転べば

皆に笑われて

その日から虐めが始まる

でも、彼女は凄かった。

出された足をするりと避けたのだ。

ずっと、ただ、きれいに。

そしていつの間にか

私の隣に、座っていた

「あら？」

貴女・・・昨日の・・・」

すごい・・・

「翡翠・・・遥華^{はるか}・・・です」

すごい・・・！

「翡翠・・・遥華・・・？」

・・・そう、よろしくね」

彼女は本当に凄かった

どの教科さえ当てられても

スラスラと答え

体育も体操選手のように

どんな技でもできた

まさに天才、その二文字だった

帰り、靴を取り出そうとすると

紙が、入っていた。

内容は簡単

『体育館裏』

ね、いつものこと。

標的が強者だったから

元に戻っただけ

私は靴を履いて

体育館裏に向かった

「翡翠・・・

遥か・・・」

「どうした？ブツブツいつて」

「いえ何も。」

あんた、学校入っていいの？」

私は足元にいる猫に言った。

「俺を甘く見るな

「これでも悪魔なんだからな！」

「ふうん。」

にしても、ほんとうにあったのね、いじめ」

「でもさすが俺の契約者だ

どんないじめもひよいひよい避けつまうなんてな」

「あなたが見たかったのは私の泣き顔でしょ

全く。」

にしても、

翡翠、遥華だなんて、

偶然には思えないわね・・・

カサ

「・・・あら

紙・・・？」

『体育館裏』って・・・

「ああ、いじめか」

「これが？」

「ああ、そこに来いってやつだ

転校生が天才だったから

標的は前の奴に戻ったんだな

かわいそうに」

・・・ふうん・・・

ふと近くのボロボロの下駄箱を見る

「この子ね・・・

・・・っ?!」

名前を見て氷付く

「どうした？」

「知り合いか？」

走る。

翡翠 遥華、たしかにそう書いてあった
あの子の笑顔はおかしいと思っていた
今思えば・・・あれは無理を・・・
ここの角を曲がれば・・・！

痛い。怖い。辛い。

助けがこないのは分かってる。
でも・・・。

「っあう・・・！」

腹を蹴られる

「残念ねえ・・・！」

虐めが無くなったとでも

思った？

思ったの？

・・・ねえ！

何か言いなさいよ！

あんたのそういう所が

気に食わないの！」

「あ・・・っ！」

うぐう・・・！」

三回くらい蹴られる

いつものメンバー

こいつの他に

女三人と男四人

一人が私を羽交い絞めにする

男子が一人私に近づく

大きくこぶしを振り上げる

殴られる・・・っ！

目をつむる。

「中々犯罪チックな事してるじゃない。」

聞き覚えの在るこえ。

目を開ける

その男子の手首をつかみ。

彼女・・・砂流さんは私に微笑んだ。

「大丈夫？」

そう、昨日と同じ響きだった。

「・・・！」

はい！」

助けが来てくれた。

私は救われたのだ。

「よくみれば、クラスメイトが殆どね。

どう？掛かってくるの？」

メンバーは皆息を飲んだ。

無理だ、そう確信したようだった。

「なら、今後いじめはなし。

他の学校でも噂は大げさだからね

そうになると、高校に行くのも限られるわよ」

メンバーは少しずつ後ずさって

家に帰っていった。

「遥華。」

「は、はい？」

いきなり呼ばれる。

「私の家。

付いてきなさい」

「わ・・・

わわぁー・・・！」

広い一室。

高級そうなシャンゼリヤ

大きなテレビにふかふかのソファ・・・

「好きな所に座っててくれる？
今飲み物取ってくるから」

「ほ・・・ほええ。」

返事が変になるほど。

かなりのお金持ちさんだった。

ど、どうしよう。

どこに座れば・・・？

と、とりあえず・・・

「紅茶でよかったかしら・・・って・・・
その座りは、貧乏丸出しね。」

私はソファでなく、床に正座していた。

「だ、だって緊張して・・・」

「いいからソファに座りなさいよ。」

話が進まないわ」

「とりあえずは、自己紹介ね。」

私は砂流 落音。

昨日言ったとおりの魔法使いよ。

そして・・・この虎猫が・・・」

「猫じゃねえし」

「・・・じゃべった・・・」

「おん？」

ああ、そうだ、俺は悪魔のトラマルシア。

トラって呼んでくれ。」

「じゃあ、トラさん？」

「どっかのドラマの主人公だな」

結局落音さんにその名前がうけて

彼のあだ名はトラさんになってしまった。

「あ、そうだ、遥華」

今日、泊まっていきなさい」

「え．．．？」

でも．．．」

「親、居ないんでしょう？」

「．．．。」

どうしてそれを．．．。

「昨日、かなり時間的に遅かったわよね。

いじめであれ、という理由があっても

子供を外に出してるなんて親がいい加減か

親が居ないかのどっちかでしょう」

「でも、落音さんの両親さんが．．．」

「私も両親居ないからね。」

「え．．．？」

「両親はかなり昔に不慮の事故で死んだわ」

「え、あ、ご、ごめんな．．．さ」

「何で謝るの。」

だって、私のせいで．．．

思い出してしまうていたらって考えてしまったから。

「．．．ねえ。」

貴女の名前。

どういう理由で付けられたの？」

「え．．．？」

「翡翠、これは緑よね。

遥華という名前はどつやって．．．？」

．．．

「それが．．．

よく、わからないんだけど．．．」

「わからない？」

「うん。お母さんとお父さんが、いつの間にかそう呼んでたみたいで」

「・・・そう。」

魔法使いはね、実名と偽名が必要なの。

砂流 落音は偽名の方・・・

実名は紅 刹那っていうのよ」

七つの罪

「紅・・・刹那？」

「ええ、偶然にも貴女の名前と真逆なの。

紅・・・赤の反対色は緑。

刹那は0と1の間のわずかな時間、

遙かはずっと先の事。」

そこまで言つて、落音さんは紅茶を飲んで溜め息をついた。

「さて、貴女の質問は？」

「・・・え？」

「質問よ、

昨日から、考え込んでるんでしょ？」

しばらく考えてから、私はやっと口を開いた。

「え・・・と

昨日のあの黒い影・・・？

あれ、何なの？」

「それは夢魔。

悪魔の一種ね。

トラは契約の悪魔だからいい奴なのよ

夢魔とかあの類の悪魔は主に人間の暗い気から魂を食べに来るわ」

魂を・・・。

その言葉を聞いた瞬間寒気が走る。

「ま、私もトラに魂を食べられてるから

人の事言えないんだけど・・・。」

「・・・それって・・・？」

落音さんは笑って答えた

「魔法使いになるにはね。

悪魔に魂を売らなくちゃ駄目なの。

実名と魂を悪魔にささげて、

永遠に老いる事の無い体を手に入れられるの。

で、ここまできたら、もっと欲しくならない？」

「・・・えと・・・？」

「世界よ。」

魔法使いになるとね

七つの罪を集めるの。

全部集めると小さいけど自分の思いどおりになる世界が手に入るの」

「・・・へえ・・・」

感心は無い。

興味も無かった。

「世界を手に入れて、何がしたいの？」

「私が望むのは、戦争も争いも悲しみもない世界。

トラにそれを言ったら、笑われたけれど

この世界をあきらめる気はないわ」

でも、落音さんの熱心に語る顔が、凄く華やかで・・・

つい、私も聞き入ってしまった。

「おーい風呂沸いたぞーい」

「あ、入れてくれたの？」

「・・・?!?!」

お風呂場から一人の男性が姿を見せる。

上半身裸で・・・。

「遥華、俺だ、俺

トラだ、バカ。」

「ト・・・トラさん？」

「ああ、あの姿は疲れるんだよ

だから普段はこの家で人の姿してるわけさ」

「へー・・・」

「で、七つの罪の話をしていたんだな。」

「ええ。」

トラさんの質問に、紅茶を飲む刹那さん。
・・・あれ？

「罪・・・ってどうやって集めるの？
具体的な形でもあるの？」

私の質問にトラさんは

「七つの罪っていつてもな

全部が全部揃っている訳じゃないんだ」

「・・・へ？」

「形も違つて出沒場所も不明。

出てくる順番も違うんだ。

最後を除いてはな」

「最後・・・？」

「ああ、最初の

暴食

強欲

怠情

傲慢

色欲

嫉妬

の六つはそれぞれ順番は違う。

だが最後の

憤怒

これが必ず一番最後に出てくるんだ」

難しい語源が並んで頭が痛くなる。

「・・・感情よ。」

「・・・へ？」

刹那さんが説明する

「暴食は食欲が抑えられない感情。

強欲は欲望が抑えられない感情。

怠惰は怠けて何もしたくないつていう感情。

傲慢は周りが自分の思うように行けばいいと思う感情。

性欲は性欲が抑えられない感情。

嫉妬は大きすぎるやきもちね。

そして憤怒は・・・

絶えられないほどの大きな怒り。」

「怒り・・・」

「・・・ま、あなたには関係ないと思うわよ。」

「そう・・・ですか？」

「ええ、先にお風呂入っていいわよ。

あなたは客人なんだから。」

微笑む刹那さんにほっとして

私は静かにお風呂場に向かった

「・・・どういうつもり？」

私はトラに問いかける。

トラは冷たく言った

「何がだ？」

「何がじゃない。

あの子と七つの罪は関係ないじゃない。

どうして教えるの？」

「気になつてな。」

「・・・は？」

「今日・・・いや、お前が昨日遥華を助けた時からか。

七つの罪が六つざわつき始めたんだよ。」

「六つ・・・？」

「憤怒は？」

「無いな。」

「気配さえも感じない。」

まさか・・・

「遥華が六つのいずれか、って言いたいのか？」
「可能性だな。」

机を叩く。
自分自身。

なぜこんなにイライラするのが解らない。

「おいおい

何ムキになつてんだよ

可能性って言ってるだろ？」

「・・・そうよね・・・ごめん。」

「お風呂上がったよー」

「寝巻き、私のでよかったかしら？」

寝巻きが無かったから

刹那さんに貸してもらった。

けど・・・。

「ちょっと、ブカブカかな」

と両手をブンブンしてみせる。

「大丈夫だそのほうが可愛いから」

トラさんが手をグツジョブした。

それを刹那さんは溜め息交じりに睨んでいた。

「・・・私もお風呂に行くわ。」

遥華は私の部屋で待つてくれるかしら」

「解った！」

「部屋広っ！

ベッドデカッ！

机広っ！」

お風呂も確かにでかったけど・・・

さすが大金持ち・・・。

「・・・。」

七つの罪・・・かあ・・・。」

ふと、先ほどの話に出てきた話が気になった。
しばらくたって、刹那さんが入ってくる。

「部屋が空いてないから、この部屋で我慢してくれるかしら」

「別に大丈夫だよ」

私は即答だった。

「・・・そう」

刹那さんは少し悲しげに微笑む。

私はその微笑に疑問を抱きながら眠りについた。

暴食。

学校が終わる。

いじめがなくなつて

普通に今を迎えられているのが
本当に嬉しい。

「え？

帰れないんですか？」

一緒に帰ろうとしたのに

刹那さんに断られてしまった。

「ちよつと、ね」

「・・・探しに行くんですか？

昨日の・・・」

「ええ、動きが少しだけだけど見えたからね」

・・・

「そうなんですか・・・」

トボトボと道を歩く。

「はあ・・・

七つの罪・・・ねえ・・・」

いつもの帰り道。

いつもの一人ぼっちの帰り道。

いつもと変わらない。

変わらないのに・・・。

「・・・欲張り。」

いじめが無くなった。

それだけでいいじゃん。

なのに・・・

わたしは尚一人が嫌なの？

友達が欲しいの？

孤独が・・・怖いのか？

「にゃあー」

はっとして足元を見る。

猫が見上げていた。

「・・・あなたも一人？」

そっとその猫に触れようとした時だった。

「・・・。」

「———？！」

何かが聞こえた。

「あっち・・・？」

声の方向に進むと、声が大きくなる。

『モット…タイ。』

「え・・・？」

ここ・・・何処？」

声に向かっていくと

大きなお屋敷に出た。

周りを見れば森だらけで

声はそこからするみたいだった。

「・・・。」

ゴクリ。

入っちゃ駄目だとか思いながら

キイイイイイイイ・・・

門を開ける。

「し・・・失礼しまーす・・・」

扉を開けて入った瞬間だった

『モット・・・モット食べタイ。』

バタンッ！

「———ッ？！———！」

声と共に扉が閉まる。

風も無いのに。

「・・・いま、もっと食べたいって言ってた？」

昨日の会話。

七つの罪。

・・・暴食。

「・・・っ」

寒気が走る。

まさか・・・ね。

その時だった。

「ねえ。」

服をつままれる

「ひゃっ!？」

振り返る。

中学一年くらいの子が居た。

この子も迷い込んだのかな・・・？

「ねえ。遊んでくれる？」

「・・・え？」

この子、一瞬、目が赤くなったような・・・。

「・・・君、このお屋敷の子？」

「ううん。」

違うよ？」

首を振られる。

彼女の腕に抱かれているウサギのぬいぐるみ。

片耳と片手が干切れていた。

所々につきはぎがあつて・・・。

「その子は私の客人よ。」

あなたは地下に戻ってなさい。」

声が響く。

「・・・解った。」

つきはぎのウサギを握ってうつむき加減で彼女はくらやみに消えて

いった。

二階のテラスのような場所から同い年のような女の子が見ていた
「迷ったの？」

「・・・えと、そうなの。」

「そう。」

でも客人は客人。」

バサツと音と共に彼女がテラスから飛び降りる。
啞然としていると
手を取られて

「客人ならお持て成しなくちゃね」

ギイツつと扉の開く音の後に私の目に飛び込んできたのは・・・

「・・・わあっ・・・!」

凄い数の食事だった。

白いテーブルクロスの掛かった細長いテーブル。

定位置においてある三本の蠟燭のライト。

映画で見るような

貴族のお食事会のような風景だった。

「残念だけど食事しかここにはないのよ

一緒に食べましょう?」

「・・・う、うん」

彼女の笑みは不気味だった。

「ねえ、本当にこの道で合ってるの?」

「ああ、間違いねえよ。」

この先が結界だ」

手を添える

ブワツと風がなびく。

「・・・。」

いい匂い、暴食ね。」

「飯にはまだ遠いんじゃないか?」

「だったら食べる前に仕留めないと。」

入ろうとした瞬間だった。

「にゃあー」

「・・・？」

猫？」

足元に猫が居た。

「・・・なんだって？」

トラがなにやら反応した。

「落音、急ぐぞ。」

「ちょ・・・どうしたのよ？」

説明してよ！」

急いで結界に入ろうとするトラを止める。

「・・・標的が解った。」

遥華だ。」

ドクン。

「何・・・ですって？」

走る。

「つまり何？」

あの子が六つの大罪なんじゃなくて・・・」

「あいつ狙いに六つが動いたんだな」

走る。

「なんで・・・遥華なの・・・。」

「知らん。」

でも、今は助ける事が中心だ」

匂いが強くなる

屋敷につく。

「・・・チツ

鍵掛かつてる・・・。」

私は呆然としていた。

彼女は物凄い速さで料理を食べてゆく。

私はふと昨日の刹那さんの台詞を思い出す

『暴食は食欲が抑えられない感情』

そして寝る前に聞いた言葉。

『食べ物がなくなると近くにいる人間まで――』

ゾクッ……。

逃げなきゃ……。

「……っ。」

恐怖で足が動かない。

この子は暴食の子だ……

間違いない……

だって、食べてる時の顔が

さっきまでの顔じゃないんだもの。

無表情で、目が見開いたまま閉じようとしない。

まるで何かに取り付かれているように。

カチャン。

そう思っている間に

彼女の目の前の食べ物がなくなってしまった。

使用人が皆ざわつく。

皆今日が仕事の初日だったのか……。

だってそうだ。

この子の使用人は……皆……。

「ゴハン……。」

その顔のまま

彼女は使用人を見る。

悲鳴と一斉に使用人は逃げる。

「―― ニガサナイ。」

ズシン。

「……あ！」

ボタンと床に叩きつけられる。

何でこんなに身体が重い

まるで自分自身が磁石になって

強力な地面という名の磁石に引っ付いているみたいに……！
使用人達も私と同じように床にへばりついていた。

「イツパイ……ゴハン……マダ、アル。」

彼女が使用人の方へと歩く。

「タリナイノ……オナカ……フクラマナイノ……

タベテイイヨネ？」

その時だった。

パリンッ

「遥華っ！」

刹那さん……！

駄目だ、声が出ない。

「暴食……。」

重力操作能力者ね」

刹那さんの声に彼女が反応する

「ジャマスルノ……？」

ジャマスルナラ……

アナタカラタベルヨ？」

「はいはい、悪魔のぼやきはいいわ。

早く決着をつけましょう。」

チャキンと何かが光る。

黙って暴食は刹那さんに向かってナイフを投げた。

刹那さんは避ける。

まるで彼女を誘導しているように。

「あ……。」

身体が……軽くなった？

「遥華、大丈夫？」

目の前まできて刹那さんが話してくれる

「……はい。」

あの、罪は・・・？」

そういうと

刹那さんは振り返って

「これ。」

そういつて髪飾りを見せた。

「コレが今回の暴食の住処

これを身に着けていた彼女は、暴食に取り付かれたのよ」

「でも、どうして・・・」

さっきの音が耳から離れない。

「今のが正式な倒し方なの。」

暴食に取り付かれた者は最終的に自分自身を食べるのよ」

「そんな・・・。」

それ以降、私と刹那さんは言葉を交わさなかった。

「ねえ。」

「あの。」

分かれ道で、二人同時に話します。

「・・・貴女からでいいわよ」

「・・・いや、刹那さんからで・・・。」

かなり揉め合った後

「あなたは六つの罪に襲われやすい体質みたいだから

これからも私の家にすまないかって話をトラとしてたのよ。」

「・・・そうだったんだ・・・。」

私自身、一人は寂しいから・・・

よろしくね」

その日の帰り道。

私達は笑いながら帰った。

「・・・。」

嘘。」

今だ壊れていない結果。

屋敷の大ホール。

本体を失い、既にもう死んでいる生首をみて

少女は無表情に呟く。

「友達・・・死んじゃった？」

少女はつぶやく

「壊れちゃったの？」

誰に問うわけでもなく。

「もう遊んでもらえないの？」

ただ、ただ疑問が増えていくだけだった。

無表情の殺意の少女を、つぎはぎだらけのウサギのぬいぐるみは見上げていた

ぬいぐるみは、静かに笑った気がした。

怠惰。

「ふあああ……。」

昼休み

刹那さんがあくびをした。

「珍しいね。」

あくびなんて」

「いや、昨日ちよつとね。」

そう言つて外を見る刹那さん。

「あと……六つだよね。」

「ええ、怪しい場所は殆ど回ってるんだけどね……。」

ふと、思いついた言葉を言ってみる。

「私が罪をひき付ける体質なら……」

私が付いていった方が早い気がするんだけど……」

「駄目ね。」

即答だった。

「どうして？」

「逆に貴女に危険が及ぶじゃない。」

それに……。」

「それに？」

「……。」

なんでもないわ」

もつと聞こうと思つたけど

チャイムが鳴りそうだったからやめておいた。

「——。」

また、何かが聞こえた。

放課後。

私だって、何かの役に立ちたい。

聞こえたほうに歩く。

『——バカナコ。』

「え？」

立ち止まる。

そつと、耳を傾ける。

『ヒトリガコワイノナラバ

ソレデオワリデショウ？』

『ナノニカノジヨハカワリラツクルノネ』

『バカナコ

コノコハシンデルノニ。』

「・・・。」

死んでる？

彼女って誰？

この子って・・・。

とりあえず歩く。

「・・・。」

結界・・・入れちゃった。」

そつか、入れるのか。

誘導されてるから・・・。

この前とは違い、次はちょっとした街のお屋敷だった。

街には誰も居なくて・・・。

「ゴーストタウン・・・？」

呟く。

深く深呼吸してから

「よしっ！」

扉を開く。

「・・・え？」

これ・・・。」

屋敷の中は一言で言えば竜宮城だった。

ホールには大きな噴水。

壁には流れる水。

階段はガラス張りで

下にも水が流れていた。

「すごい・・・綺麗・・・。」

十分くらい見惚れていた。

すると

「・・・イラッシャイ」

声が聞こえて振り返る。

女の子、同じ年くらいの。

でも、何か変だった。

「アナタツテフシギナヒトネ」

「不思議？」

「エエ、トテモ。」

コロサレルトカオモワナイモノネ

マ、メンドクサイカラヤラナイケド」

確信。

怠惰だ。

彼女は噴水の奥にあつた椅子に座った。

私は疑問を抱いた。

この子は、最初から怠惰だ。

本当のこの子は何処にいるんだろう。

それに、あの子は一定の動きしかない。

目に光もないし

目の形もまん丸で・・・

まるで・・・

「ドール？」

ビクリとする。

彼女は言った。

感情の無い顔。

感情の無い声。

そう、人形のようにだったから

私は妙な恐怖を感じた。

その一言だけで、彼女は黙ってしまった。

まるで、誰かを待っているかのように・・・。

「あの・・・馬鹿。」

私は遥華を探していた。

トラにあの子の見張りを頼んでおいたのに

見失ったといわれた。

何故。

私は遥華を守っているのか。

解らない。

でも、面影があるのだろうか。

一瞬浮かぶ顔に

頭を振る

「あの子は・・・

うつん。

遥華は遥華。

あの子は違う。」

一人が楽だと思っていた。

一人の方が悲しみも少なくて

誰も信じないほうが

絶望も薄い。

・・・って

そう信じていたのに。

「あの子に会ってから

本当に調子が狂うわ。」

走る。

「・・・っ」

「・・・っ？」

あ、ごめんなさい！」

途中人とぶつかる。

顔もまともに見ないまま走る。

「はぁ・・・っ・・・はぁっ・・・

・・・見つけた。」

結界を見つける。

水の音・・・怠惰ね。

ちよつと安心する。

怠惰は人を殺すことはあまり無いから

「ネエ。」

怠惰に声をかけられる。

「・・・？」

「コツチ、オイデ」

おいでおいでされる。

「・・・何？」

「チョットゴメンネ」

そつともたれられる。

少し戸惑っていると

「ゴメンネ

コノカラダノホンニンガノゾンデイルコトダカラ」

この身体の本人・・・。

「ソウ、アナタノオモイドウリ

コノコハシンデルノ」

ゾクリとした。

死んでるって事は・・・。

「ニンゲンジャナイノヨ

コノカラダハカノジョガコノコライキカエラセヨウトシテ

ツクツタニンギヨウナノ」

・・・。

「彼女って・・・誰？」

「・・・アナタニハリカイハムズカシイデシヨウ

サア、タスケハキタケド、アナタハドウスルノ？」

助け・・・？

「・・・驚いた。

気付いてたなんてね。」

扉から刹那さんが入ってくる。

「・・・刹那さん。」

「・・・ネライハコレ？」

怠惰は耳を見せる

綺麗なイヤリングがつけてあった。

「・・・確かに、確かに怠惰ね

でも、そう簡単に譲ってはくれなさそうね」

「ウフフ、イッセン

ネガエルカシラ？」

「・・・？

驚いた、怠惰本人からの宣戦布告だなんて・・・。

勿論OKよ？

売られた喧嘩は買う方なの」

二人は一瞬黙った。

私はその間とても長く感じて

時が、止まったのかと思った。

定期的に止まる噴水が、止まった。

瞬間だった。

ザバアアアアアアアア・・・！！！！

屋敷中の水が刹那さんに襲い掛かる。

「せ、刹那さ・・・？！」

気付けば私の周りは

水が固まって檻のようになっていた。

「水属性能力者・・・ね。」

遥華、少し待ってなさい

すぐ助けるから。」

刹那さんが波間から微笑む。
ドシン。

刹那さんの目が光ったと同時に水は全て地面にたまった。
怠惰も地面に倒れこんでいる

「・・・！」

これって・・・！」

重力操縦・・・！

そうか・・・

手に入れた罪の属性を自分がもらえるんだ・・・！

「・・・アリガトウ。」

ヒサビサ二・・・

タノシカッタ。

サア、コロシナサイ」

「ええ、そうするわ」

そういつて刹那さんは怠惰からイヤリングを取った。

その瞬間水はなくなり

怠惰の身体がガクリとなった。

ただの、抜け殻。

ただの、人形に。

「これが怠惰の最後。」

悲しいわよね。」

「・・・はい。」

ふと刹那さんをみる。

凄く悲しい顔をしていた。

気が付いたのか

刹那さんは私の顔をみて

ふつと笑った。

「さ、帰りましょうか」

「は、はい。」

「・・・。」

二人が帰ったお屋敷。

抜け殻の人形を見て呆然とする一人の少女。

彼女の姿は

その人形と瓜二つ。

「・・・。」

彼女は震える手で人形のイヤリングを確認した。

「無い。」

無い。無い。無い。無い。無い。無い。」

ブツブツと呟く。

彼女のブレスレットは光り

お屋敷の内部は暑くなり

噴水からは火花がちり

壁には火が灯った。

ガラスで出来た階段は熔け

もう道さえ無くなった。

「———— 赦サナイ・・・。」

強欲。

「もう二つも集まったねー。」

私は刹那さんに話す。

机の上には暴食の髪飾りと怠惰のイヤリングが載せられていた。

「ええ。」

ま、辛いのはこれからだけれど・・・。」

刹那さんは溜め息をつく。

「辛いつて・・・戦いが・・・？」

悩む刹那さんの変わりにトラさんが話してくれた。

「そうだな。」

暴食と怠惰は七つの罪の中で最も終期が似たような話ばかりだからスラスラと手に入れることが出来たんだが・・・。」

「他は違うの？」

「ああ、全くだ。」

たとえば嫉妬。

多くが元恋人とか恋心の嫉妬が多いが

たまに姉妹兄弟、親子のドロドロした嫉妬まで幅広い。

あー・・・そうだな。

一番酷かったのは・・・。

姉弟で姉が人に好かれるからって弟が殺そうとしてたのもあったな。」

「・・・。」

ピクリ。

「・・・刹那さん、どうしたの？」

わずかな刹那さんの動揺。

しばらくの沈黙の後

「・・・なんでもないの。」

「……………そう、何でも……………」

その夜。

私は眠れなかった。

いや、今は夜中の二時。

悪夢をみて、いま寝られない。
怖くて。

「……………」

夢の内容はこうだった。

薄暗い裏町通り。

私は誰かと戦っている。

近くでは遥華が心配そうに見ていた。

おかしなことに。

家にあるはずの罪が遥華の手の中にあつた。
しかも

まだ私が集めていない嫉妬が増えていた。

相手は笑いながら私を切りつける。

私は自分を守るのに精一杯。

ふと、私の意識は急に薄れた

相手に何かを言われたのだ。

何を言われたかは覚えていない。

でも

とても嫌だったことは、確かだった。

その瞬間私の防御が外れて

私は正面から相手の攻撃を受けて……………

「……………」

その後のことは、思い出したくない。

夢は夢なのだ。

そう信じるしかない。

そう思つて寝付こうとした時
誰かが部屋をノックした。

「おい、起きてるか」

トラだった。

「ええ、どうしたの？」

扉越しに喋る。

「遥華が居ない。」

・・・。

「なんですつて?!」

「・・・んー。」

黙つて出てきちゃったけど

別に大丈夫だよな。

変な夢を見てしまった。

「やっぱり月は綺麗だなー。」

『クスクスクス』

笑い声。

私はふらふらと惑わされるように

声の方向にと足を運んだ。

はつとする。

「・・・嘘。」

私の前に現れたのは

今までどうりの結界・・・。

いや、以前手に入れた『暴食』のお屋敷だったのだ。

「主が消えれば、消えるんじゃないの・・・？」

私はつばを飲み込み

キイイイとなった扉を開いた。

「・・・。」

あれ？」

私は見渡す。

ちよつと中身が違うのだ。

暴食と発覚したあの食事部屋も
扉自体が消えてなくなっている。

「……。」

啞然としてるといきなり服をつままれる。

「きつ……。」

叫ぼうとして振り返る。

そこには……

「あれ？」

君は……。」

少女はあの日と同じ服、同じぬいぐるみを抱いて立っていた。
優しく声をかけようとしたが。
ハッとした。

あの日、暴食は彼女に言った。

『その子は【私の】客人よ。

あなたは地下に戻ってなさい。』

と。

私の。

地下。

出る答えは一つしかなかった。

彼女もここに住んでいたのだ。

そして暴食が【私の】と言った事。

それはこの子がもう一人の七つの罪の一つを持っていること。

「ねえ。遊んでくれる？」

あの日と同じ質問が来る。

黙っていると

「遊んでくれるんでしょ？」

と、少し強引な変え方になった。

「ねえ、遊ぼうよ。」

「・・・。」

確信。

強欲。

しかない・・・かな。

傲慢によく似てるけど違うもの。

ゴウ。

そんな音と一緒に一気に気温が下がる。

寒い。

「・・・え？」

私はいつの間にか真つ暗な部屋・・・

その中にある牢屋の中に入っていた。

『ケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタ』

笑い声が響く。

怖い。

「遥華！」

刹那さんが牢屋に駆け寄る。

「刹那・・・さん」

駄目だ。

意識が・・・遠く・・・。

ここは・・・何処だろう。

段々周りが見えるようになる。

楽しそうな笑い声

『あはは』

『うふふ』

小学生なのか

とても幼い笑いだなあ。

でも、彼女たちを見て愕然とした。

そう、笑いあっていたのは

幼き日の暴食の少女と強欲の少女だった。

幸せそうに笑う彼女達。

どうして、この後彼女達は悪魔との契約を結んでしまっただろう。

私は、そこで意識が戻ると確認した。

「・・・！」

刹那さん！

目が覚めたら既に刹那さんは戦闘中だった。

相手は勿論強欲だ。

強欲は氷の能力者らしく

雷が刹那さんを襲っていた。

一時間が経過しただろうか。

強欲は攻撃をやめなかった。

刹那さんは時々相手が呪文のように何かを口走っている間に剣を振り回す。

私はふと、彼女の呪文のように聞こえていた部分に耳を傾けた。

私は、真実が解ったとき。

「やめてっ！」

そう叫んでいた

気付けば刹那さんとふたりで結界の外に居た。
追い出された。

そうなんだろう。

「ごめん……」

強欲……取れなかったね……」

いいのよ、あなたが無事であれば、それで
ところで、何がやめてだったの？」

私は少し黙って口を開いた

「さつき、意識がなくなつて

ふとあの子と暴食の子が楽しく笑つてるところを見たの。

で、さつき

ゴニョゴニョいつてる言葉……

聞いてたら……

言つてたの、あの子。

早口で聞こえなかったただけだった

『いやだいやなの

あの子は私の唯一の友達なの

つれてかないで

私を一人にしないで

おねがいおねがいだから

わかつてるのわかつてるんだから

貴女があの子を殺したんでしょ？

いやなの私も死にたいの』

つて……

だからつい、やめてつて。」

かなりの沈黙。

「そう

ま、今回は仕方ないわ
剣はあたらないし
重力コントロールしても
風になつて帰ってくるし
水を投げつけてみたけど
一瞬で凍っちゃったし。
結局、勝ち目なんて無かったのよ。
また来ましよう、ね」
「う・・・うん」

「あ・・・あ・・・。」
強欲はボロボロだった。
魔法使いと人間を追い出したあと
こいつに襲われた。
強い。
強欲は怖気づいていた。
こいつは手を伸ばしてぬいぐるみを奪った
いやだの声も出ないまま
少女はガクリと息途絶えた。
こいつはにやりと笑つて
「ひとっつめ・・・。」
ふふふ」
そういつた瞬間
結界が崩れ、無くなった。

傲慢。

「変な夢を見たの」

思い切って言ってみる。

「変？」

刹那さんは首をかしげる

「悪夢っていうのかな・・・。

なんか生生しくて・・・」

「奇遇ね。」

私もそんな感じの夢を同じ日に見たわ」

「刹那さんも？」

話そうとしたら

「ちよつとすまんな」

トラさんが入ってきた。

「どうしたの？」

トラさんが外の見回りから帰ってきたのだ。

トラさんは溜め息をついてから

言った。

「結界が消えた。」

ガタリ。

刹那さんがたつ。

「何処の結界？」

トラさんは表情を変えずに

「この前の。」

暴食と強欲の屋敷結界だ」

「え・・・」

私はつい声が出る。

刹那さんを見ると信じられないと目で訴えていた

「残念だったな。」

トラさんの言葉に刹那さんは舌打ちをした。

どうやら他の魔法使いに強欲を取られたみたいだった。

「それから。」

遥華に言われて調べてやったよ

暴食と強欲の関係。」

私の前にパラリと紙が舞う。

「あ、ありがと……。」

そつと目を通す

『暴食に取り付かれていた少女。

本名 伊坂^{いさか} 羅々（らら）

強欲に取り付かれていた少女。

本名 迦舞^{にまゐ} 奈々（なな）

親友だったが取り付かれてからは羅々が奈々を引き離す形に。』

ふと、強欲……。奈々が言っていた言葉が浮かぶ

『いやだいやなの』

あの子は私の唯一の友達なの

つれてかないで

私を一人にしないで

おねがいおねがいだから

わかってるのわかってるんだから

貴女があの子を殺したんでしょ？

いやなの私も死にたいの』

唯一の友達。

「ごめん、ちよつと考え事してくる。」

私は外へ出た。

ドン。

考えていると人にぶつかった。

「あっ！

ご、ごめんな……。!?」

息を飲む。

「ごめんなさい、怪我はしなかったかしら？」

彼女は私の顔を見て微笑む。

彼女は・・・

いや、別人だろう・・・。

彼女は怠惰によく似ていた。

「お詫びといっただけど・・・

あそこの喫茶店でお茶でもおごるわ。

どう？」

つい、付いていってしまふ。

「お金はいいわ

私が払うから。」

彼女は微笑む。

「す、すみません・・・。

なんだか、初対面なのに・・・。」

「いいのよ

なんだか貴女を見たら

妹を思い出してね・・・。」

「妹・・・さん、ですか」

「ええ・・・。

事故で死んでしまったけど・・・。」

そういつて窓の外を見る。

「・・・なんか。

ごめんなさい。」

「いいのよ。

思い出さないと駄目なことなんだから。」

「ありがとうございます。」

「いえ。」

それより・・・。」

彼女が笑顔で、言った。

「妹のイヤリング。」

取ったノハ誰なのかしら？」

ソワリとした。

逃げようとしたけど遅かった

彼女のブレスレットがきらりと光り

彼女の目が赤く光った。

私は意識を失った。

「・・・。」

刹那、結界が疼いてる。」

「何処の結界？」

私は先を越されたという絶望から抜け出せずにいた。

トラの、次の言葉を聴くまでは。

「何時ぞやの怠惰の結界だな。」

でも中身は傲慢だ。

同じく中から遙華の気配。

意識が無いみたいだし、連れ去られたか。」

「・・・ちっ。」

つい舌打ち。

「行くわよ。」

傲慢・・・ちよつと面倒ね。」

ゴオオオ。

そんな音と高温に目が覚める。

「・・・？」

あつつ・・・！？」

見覚えがあるつくり。

でも、燃えてる。

何で・・・？

水が出ていた噴水からは火花がちり

水が涼しげに出ていた壁には火が轟き

ガラスで出来た階段は熔け

もう道さえ無くなって・・・。

「あら。

お目覚め？」

声の方を見る

かつて怠惰が座っていた場所に

彼女が座っていた。

私の周りには火で作られた鳥かごのようなつくりの檻。

「私ハ傲慢よ。

あなたガアの子を殺シた魔法使イノ側に居た事ハ知ってルノ」

傲慢・・・。

『バカナコ』

ふと、怠惰の声が浮かんた。

彼女の言っていた馬鹿な子って・・・まさか。

いや、間違いない。

彼女はイヤリングを探していた。

妹そっくりの人形を作って。

イヤリングをつければ確かに怠惰としてよみがえるのだから。

ちよっとまって。

ちよっとちがう。

今までの罪は何で話してた・・・？

暴食。

『ゴハン・・・。』

怠惰。

『・・・バカナコ。』

強欲

『クスクスクス』

そして・・・。

『私ハ傲慢よ。』

傲慢。

間違いない。

合ってるんだ。

他の罪達は自分のしたい事をしてるだけ。

でも。

傲慢と彼女。

破調が合いすぎて

罪自体が彼女に同情してる・・・。

「遥華あああああああ！！！！」

扉が勢い良く破壊される。

「来タわね」

「せ・・・刹那さん・・・。」

私を見て、刹那さんは一瞬安心したような顔をした。

そして傲慢を睨みつける

「ドウモ。」

私の妹を殺シテくれた魔法使イさん。」

刹那さんはその言葉と傲慢の姿を見て一瞬考えてから

「と言う事は、怠惰の姉かしら？」

・・・双子の。」

何故か刹那さんは双子の部分のためらった。

傲慢は笑う

「エえ、その通りダワ。」

私が・・・私がドレダけの時間をかけてあの子ヲ

蘇ラセタと思ってるの？！

私はネ・・・あの日目ノ前でアノ子をヒキ逃ゲサレテから

あの子の存在ガ儚い事を知ツタわ！

あの子を亡クシて・・・あの子の存在ガドんなニ大切だツタか・・・。

だからね

私は人形師二頼んデアの子そっくりノ人形を作ってモラったの！
だから今ま夕妹を殺した貴女を・・・

ココで殺すわー!!」

最後の部分は殆ど叫んでいた。

「・・・っ!」

炎が刹那さんを襲う。

剣は解けかけた。

水は蒸発。

重力も無力。

「何で・・・っ!?」

私は。

ただ、祈る事しか出来なくて。

「ばーか。」

ふと、そんな声が響いた。

傲慢の気が散ったのか

私の檻は消えた。

「遥華!」

「刹那さん!」

「とりあえず逃げるわよ!」

私達は出口に向かって走った。

「に、逃がせな・・・っ!?

あンタ・・・何?」

傲慢が追おうとすると誰かに止められる。

足元が凍っている。

「あんたね・・・

さっきの声・・・。」

後ろが振り向けない。

その分恐怖は多い。

「僕は罪目当てじゃないけどね。

ただ、君にあの人を殺されると

僕的には迷惑なんだ。」

「・・・っ!？」

チャリン。

ブレスレットがはずされる

「やつ・・・やめ・・・。」

バタリ。

傲慢だったものは倒れた。

そして、黒い服の彼は、言った。

「あの人を殺されたら困るんだ。
だって。」

僕が紅 刹那を殺すんだから。」

木の上で結界が消えた事を確認してから
彼は呟く。

「これで二つ目・・・

ふふふ

あと・・・一つ。」

嫉妬

「・・・」

「どうしよう」

私は広い都会で立ち止まっていた。

トラさんと刹那さんが魔法使いの集会（？）に行ってしまったから私はトラさんに遊園地チケット貰って今まさに帰ろうかとしてただけど・・・。

「見事に・・・迷ったなあ・・・」

大きなビルにはさまれた

看板が無くても

解るような

・・・そう、言ってみるなら

まさに、裏道。

誰も通らない、道。

というかどうかやったら此処に付いたんだっけ。

地図の見方？

「多分違う・・・。」

溜め息を付きながらとりあえず人を探して進む。
十分くらい歩いただろうか。

（うつわ・・・。）

前方にいかにもというくらいの男子二名。

私は直感した。

逃げなきゃやばい事になる。

クルッと一回転する。

走って去ろう。そうしよう。

足を踏み込んだ瞬間だった。

「おい。」

手を捕まれた。

私が気付く前から気付いていたようだった、
って、そう冷静に考えてる時間ないって！！！！

「は・・・はい・・・。」

ゆっくり振り返る。

怖そうなお兄さん達が私の顔を覗き込む。

半分涙目。

「金目のもんはもってねえみてえだけどよ・・・。」

そっぴいながら近付かれる。

壁に激突。

逃げられない。

横に逃げようと思うと

怖そうなお兄さんの手が行く手をさえぎる。

都会って怖い。

もう一人のお兄さんが目で私の身体を見る。

ワンピースなんか着てくるんじゃない。

というか強姦直前って結構まれに起こるのね・・・。

相手は男の人だし・・・

力で勝つ事は無理かなあ・・・

これはあきらめるか・・・。

目を閉じる。

「ふぐうつ!？」

そんな声で目を開ける。

さっきまでのお兄さん達が倒れている。

二人とも。

怪我はして無い。

一人のお兄さんに手を添えていた女の人が私に微笑んだ

「大丈夫かしら？」

美人な人だった。

顔立ちも綺麗でヴェールがかかった髪。

「は、はい

ありがとうございます。」

私の返事に彼女は微笑んだ。

「良かった。」

見たところ都会に慣れてないから

迷っちゃったみたいね。」

「は、はい。」

彼女は私に手を差し出す

「いらっしやい。」

出口まで案内するわ」

私は無言で彼女の手を握った。

途中。

彼女は言った。

「この街はね。

特に強姦・輪姦、結婚詐欺沙汰の事件が多いの。

だからさっきの男共もその中の一部って訳。」

結婚詐欺の話話す時の彼女の顔が曇る。

恐らく、彼女もその被害者なのだろう。

「私ね、彼氏がいたの。」

喫茶店に連れて行ってもらい

そこで彼女は言った。

「彼氏・・・ですか。」

「ええ。」

結局、彼も結構女たらしで。

結局私は捨てられちゃった。」

寂しそうな微笑み。

私はかける言葉が無くて

つい黙り込む。

「ところで・・・」

彼女の顔が真剣になる。

妙な嫌な予感。

いや、気付きはしていた。

出なければここまで付いて来なかったから

「魔法使いさんの親友ちゃんでしょ？」

貴女」

ほらね。

「罪の方だったんですか。」

冷静に判断。

もう慣れた。

「ふふ、そうよ。」

嫉妬よ、よろしくね」

おかしそくに彼女は笑う。

「嫉妬・・・つまり彼氏さんの事・・・

あきらめてないんですか」

「ええ」

微笑まれる。

「それから・・・」

そして

「彼は色欲だから。」

ガタリ。

私は衝撃的な事実席を立つ。

「とりあえず

貴女を拉致らせてもらうわね

罪として。」

彼女が私に触れた瞬間

私は一瞬ビリッとして倒れた。

「あら・・・」

遥華まだなのかしら」

私は家に戻って遥華が居ないのを確認した。

「刹那、それより・・・」

「ああ、そうだったわね

ノンレギュラー

否魔法少女の事でしょ？」

今日の集会の内容。

それは七つの罪を無断で集める者がいる

というものだった。

大体予想は付く。

彼は・・・きつと・・・。

「ん？」

刹那、結界だ。

しかも嫉妬の」

「嫉妬？」

また突然ね。

場所は？」

「その件だが・・・

やっぱ一人にするんじゃないかっただみただな」

・・・。

「遥華・・・。

彼が来るまで時間の問題ね。」

私は着替えて遥華のいる街へと急いだ。

刹那を見送る

黒い影。

彼である。

「・・・。

さて、今回は手を出さないからね」

「ん・・・。」

目を覚ます。

ダンスホールのど真ん中で倒れていた。

「おはよう

ゆっくり眠れ・・・た訳、ないわよね。」

階段のところで嫉妬が指から電気をビリビリ出しながら言った。

なるほど、男の人も私も

手がスタンガン代わりになって気絶・・・ってわけか。

「・・・原罪者^{げんざいしゃ}って、わかるかしら。」

「・・・へ？」

原罪・・・ですか？」

「ええ。一言でいえば

私達七つの罪を生み出した張本人ね。」

「・・・張本人。

つまり

暴食、怠惰、強欲

傲慢、嫉妬、色欲、憤怒

を全部持ってたって事ですか？」

「ええ。

ちなみに順番に言えば

傲慢、？

強欲、？

暴食、？

怠惰、？

嫉妬、？

色欲、？

憤怒、？

だけど・・・。

【彼女】は『零』そう呼ばれているわ

彼女は今は憤怒に付き添ってるみたいだけど」

「・・・あの、

憤怒、誰だかわかるんですか？」

私はつい気になった

「……」

本当に面白い事を聞くわね貴女。

知ってるわよ

憤怒はね

【彼女】が死ぬ寸前に委ねた罪。

つまり【彼女】がそのままコピーされているの」

「じゃあ……」

ボタン。

激しい息切れと共に刹那さんが入ってくる

「……」

私をみてホッとしている刹那さん。

「どうも？」

嫉妬は微笑む。

あの微笑みは創りなのか。

「……はい。」

チャラン。

嫉妬はネックレスを刹那さんの前に差し出す。

「……？」

何のまね？」

刹那さんは首をかしげる

「何って……」

最初から私は戦わないつもりだったわよ？

この子連れ去ったのは貴女が来るだろうと思ったからだし」

「……」

刹那さんは黙って彼女のネックレスを奪う。

嫉妬は微笑んだまま崩れた。

何がしたかったのだろう。

帰り。

ドンッ。

「あ、ごめんなさい・・・」

疲れていたのか

男の人に肩をぶつける

彼の横には綺麗な女の人。

彼の指の指輪が光っている。

見なかった、

私は何も見なかった。

・・・。

色欲。

「どうかした？」

「・・・。」

なにも。」

そういつて裏道に入った瞬間だった・・・

「・・・！」

黒い影が立っていた。

刹那さんが私をかばう。

「・・・久しぶりね。」

刹那さんは、少しだけ声が震えていた

黒い影は

「ああ、四年ぶりかな

・・・姉さん」

よく見れば。

刹那さんの色違いのような格好

そっくりな顔。

違うのはスカートかズボンかの違いだった。

真実。

「え・・・ええ？」

私は何がなんだかわからない。
整理しよう。

彼は刹那さんのことを姉さんと言った。
そして四年ぶり。

刹那さんの両親が亡くなったのも四年前。
「貴方ね。」

罪、私達の邪魔しようとしてるの。」

刹那さんは話を進める

刹那さんの言葉に彼は笑う

「邪魔？邪魔だって？」

これは僕が考えた作戦だよ

こうしないと君が苦しまないし。

君が罪に殺されては困るんだ、僕がね」

「・・・」

恨んでるのね。

私を。

自分も。」

刹那さんは呟く。

「でもさあ

僕は驚いたよ

どれだけ姉さんは幸運なんだい？」

「・・・？」

何の話よ」

幸運？

彼の次の台詞には

私自身も驚いた

「とぼけないでくれよ。」

まだ六つ集めていないのに姉さんはもう既に

【憤怒】を手に入れているんじゃないか」

「?！」

二人で顔を見合わせる。

勿論私達は憤怒と出会った事もないし

憤怒も手に入れた覚えも無い

どうやって、というかどうして解るのか・・・。

「決闘しようよ、姉さん。」

決闘という言葉に刹那さんの顔が険しくなる

「決闘・・・ですって？」

「ああ、明日の夜中の十二時に此処に集合。

持っている罪が勝利した者の物。

決闘中は罪の力は使わない。

いいね？

じゃあ、待つてるからね」

そういつて彼は消えた。

「・・・。」

「・・・刹那さん・・・。」

「・・・帰るわよ」

「・・・っ。」

うん・・・。」

「彼は私の双子の弟よ」

家に帰ると、刹那さんが行き成り話し出す。

「刹那さんの・・・弟さん。」

「・・・。」

彼はきつと・・・

いや、絶対私を殺す気よ。」

「・・・みたい、だね。」

ねえ、刹那さん」

切り出してみる。

この前話せなかったから

「私、この前変な夢を見たって行ってたよね」

「ああ、そうね。」

「いつも見たいに、私が捕まってる。」

刹那さんが助けに来てくれるの。」

「……。」

「でも。」

「……でも？」

「助けに来てくれた事を私は涙を流して喜んです。

刹那さんは凄く自信に満ちたような顔で歩いてくるの
で、刹那さんの背中に……大きな翼があって……」

「翼……ね」

「変な夢だつて、言っただじゃん。」

その後少しか話をし

私達は眠りに付いた

明日の、不安と嫌な予感を胸に。

「来ないかと思っただけ

来てくれたんだね、姉さん」

深夜十二時丁度。

彼は通路の端に持つてる罪を置くように支持した。

私はとりあえず

遥華に罪を持たせ通路の端に立たせた。

そのほうが安全だから

彼も遥華の隣に罪を置いた。

強欲、傲慢……色欲。

きっと昨日あの後取りにいったんだろう。

「さて。」

月が真上に来る。

私達は剣を構える。

月が、真上に。

ガッ！

一斉に飛び掛る。

キンッキンッという剣と剣のぶつかる音だけが

深夜に響く。

あれ？

この光景・・・。

真っ暗な通路

——薄暗い裏町通り——

私は弟と殺し合い。

——私は誰かと戦っている——

——近くでは遥華が心配そうに見ていた——

そう、遥華は見守ってくれてて。

——家にあるはずの罪が遥華の手の中にあつた——

そう、だって賞品なんだもの

——まだ私が集めていない嫉妬が増えていた——

そう、だって昨日手に入れたんだもの

——相手は笑いながら私を切りつける——

そう、弟は今も笑って・・・。

私は攻撃を防ぐのに精一杯。

あの夢と確かにリンクしている。

ああ、予知夢って本当にあったんだなあ。

「憤怒が知りたい？」

弟がささやく。

聞いちゃ駄目。

聞いてしまえば・・・。

死ぬ。

「憤怒は――」

「なっ――!?!?!?!」

そんな・・・。

そんな事って・・・。

啞然としていると勢いよくきりつけられる。

「刹那さあああぁん!?!?!」

遥華の悲鳴。

静かに崩れ落ちる。

まだ・・・意識はあるけど。

もう、立てそうには・・・無い、かな。

ああ、神様は助けてくれないのね。

・・・そりゃそうか。

四年前。

私は許されない罪を犯したんだ。

なんで救われないのかな。

両親を殺して、幸せになれると思ったのに。

友達も出来て、夢の力も手に入れて・・・。

でも弟に恨まれるし・・・。

ああ、神様

彼方が本当に存在するなら

教えてよ。

私が生きた証って何？

私が生まれた理由って、何・・・？

私の目から、何か冷たいモノが流れた気がした

「せつ・・・な、さん？」

私は信じられなかった。

目の前で刹那さんが死んだ。

「い・・・いや・・・。」

頭を抱える。

座り込む。

叫ぶ力も入らない。

涙も出ない。

「約束は約束だからな。」

彼が罪を持っていく。

私はゆっくりと刹那さんに近づこうとした

「おい。」

お前も来るんだよ」

手をつかまれる

「・・・え？」

振り返る。

何で私も？

意味が解らない。

どうして？

嫌だ。

嫌ダ。

・・・。

今、私力タカナで・・・。

まさか。

「やっと気付いたのか。」

お前も賞品なんだよ、憤怒」

全てに気付く。

どうして私の存在が六つ全ての罪を動かせ

彼女達が私に接触した理由を。

憤怒は人間。

普通に生活していれば罪は出てこない。

しかし

憤怒以外の罪が憤怒に一度でも触れれば

憤怒は完全体へと変化する。

まず暴食。

彼女とはしつかり部屋に案内される時に手をつながれていたなあ。

それから怠惰。

もたれられたなあ。

強欲。

裾引つ張られた時に少しだけ触れた。

傲慢。

運ばれる時に触れられたんだろうなあ。

嫉妬。

手繋いだなあ。

色欲。

昨日肩ぶつけたし、多分それ。

私は全てを整理してから

刹那さんの死体を見る。

もう、生き返らない。

泣きたい、でも、涙が出ない。

私は、なされるまま

彼に連れて行かれた。

そつと。

「刹那さん・・・

・・・っさようなら・・・！」

小声で呟いた。

真実。(後書き)

あ、どうも、ノルです。

癒えぬ傷跡、どうでしたか？

まあ、ハッピーエンドじゃないので。

しつくり来ない、そんな方もいらっしゃるでしょう。
しかし！

諦めるのはまだ早いのですよ！（何

実はこの話、

続編がごきます！

（でもその続編もハッピーエンドじゃない気ガス）

まあ短編でハッピーエンドだったら

みたいなやりますけど。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5043t/>

癒えぬ傷跡。

2011年10月8日20時27分発行